

龍谷大学世界仏教文化研究センター
2016年度臨床宗教師特別講義

講演名	いのちの妙味ー病院に僧侶がいるということ
開催日時	2016年12月12日(月) 10:45~12:15
場所	龍谷大学 大宮学舎 清風館 B101 教室
講演者	徳永道隆先生(延命寺住職、JR広島病院緩和ケアチーム)
司会	鍋島直樹先生(龍谷大学 文学部教授)
主催	龍谷大学世界仏教文化研究センター 応用研究部門
共催	龍谷大学実践真宗学研究科
参加人数	32人

【講義のポイント】

現在の終末期医療は、患者による自己決定が大切にされており中心となっている。どのように人生の終わりを決めるかという基準は、ピーター・シンガーによって切り開かれた。それは、パーソン論(思考能力を持った成人が優先される)であり、極端な理論だと言われている。清水哲郎は「物語るいのち」を提唱し、会田薫子は「正しい選択はない。考え続けること」と主張してきた。講師は、仏教の生命観には縁起の思想があり、自他のいのちに繋がりを認める考え方は多くの人に知っていただけると良いと考えたと述べた。なぜなら講師が、緩和ケア病棟の会議に参加する中で感じたことは、悲しみとの出会いそのものが、いのちに対する感動を生み出しているということであったからである。

【講義の概要】

■はじめに

住職であり寺院での活動を中心にしてきた講師の生活は、ある人との出会いによって大きく変化したとおっしゃった。それは、2008年に長倉伯博先生との出会い、僧侶が寺院の外で活動する意義を感じたからだ。以降、自坊近くの病院と念入りに交渉をし、2010年には広島県立病院のカンファレンスに参加することになった。また、2016年7月からJR広島病院緩和ケアチームに参加している。

■生命倫理とは

命に対するルールづくり。2002年医学系大学生命倫理委員会連絡会議で3点が定義づけられた。

- 1.生命倫理は共同体・社会の行動規範であり、個々人の倫理観とは異なる。
- 2.生命倫理は社会の中で生成・発展・成長・醸成する。先端医療の発展、時代とともに変化する。

3.生命倫理は生命科学の進展を阻止・阻害するものではない。

それは「生命科学の発展がもたらす可能性と人間性の尊重・尊厳とのバランス」である。例えば、脳死状態の人から臓器移植ができるという社会のルールに対して、どう選ぶかは各自の死生観に従って選択することになる。問題がないわけではなく、生命の問題を個人に突き詰めるといふ難点が指摘されている。

■なぜそのような流れになるのか

オーストラリア生まれの哲学者ピーター・シンガー(1946～)は、「生と死の倫理学」の中で「古い戒律から新しい戒律へ」と訴えた(1994)。それには以下の点の特徴があり、徳永先生は※印のように問題提起した。

- ・「人命をすべて平等の価値を持つものとして扱え」→「人命のいのちの価値は多様である」※例えば、自分で呼吸が出来なくなった人の人工呼吸器を外すかどうかという問題
- ・「あなた自身の生命を決して奪うな。また他人が自分の生命を奪うことを常に阻止するように努めよ」→「生死に対する個人の欲求を尊重せよ」
※自己決定権中心主義による、人格ある者の「生きる権利」と「死ぬ権利」
- ・「すべての人間の生命を人間以外の生命よりもつねに価値あるものとして扱え」→「種の違いを根拠に差別するな」※別の言い方をすると「人格の有無の違いを根拠にして差別すべし」つまり、人格の無い者は人間として扱わなくてもよいということに繋がる。

すなわち、尊厳に対する次のような序列が出来上がっていることが明らかになった。

人格ある者 > 人間一般 > 他の生物

■生命の二重性と仏教の生命観

これに疑義を呈したのが、東京大学の清水哲郎氏である。「物語られるいのち」は人々との関わりで形成され、それがQOL・本人らしさを決めることを表明した。さらに、会田薫子氏は「一緒に考え悩むことが決定の倫理的妥当性を担保する」という見解も提示された。しかし、医療現場では「そうはいつでも。。。」が本音である。理想と現実の狭間で例えば「担保する」という一言すら医療者は現場で主体的に言い出せないからだ。一方、仏教の生命観には安心を覚える。医療の現場で、仏教の生命観への理解が広がれば救われる医療者も増えると思う。現実には人間中心で限界が存在する。医療者を含めたすべての人々の「衆生という自覚」が、「悲しみの中にあるいのちである」ことがわかる。その気づきによって温かさが生まれる。

生命倫理がパーソン論に向かっていくことや、物語を大切にする医療者であれという提唱も尊重しながら、縁起思想や一切衆生という理に学ぶことが今、必要とされている。

【まとめ】

実際に病院へボランティアとして緩和ケアチームに入って活動しておられる先生の話は、受講者の心を掴んでいたように感じた。前半は理論を中心に、後半は現場のエピソードが中心に話が進んだ。「死を目の前にして何を考えて過ごせばいいのかわからない。」という患者さんを目の前にした時、どのような声かけができるだろうか。徳永先生は、全ての命が繋がっているということ。浄土で出会える世界があるということ。南無阿彌陀仏のお念仏として仏さまの心が私たちに届いていることを患者さんに伝えたという。対話から、いのちの質的転換が生まれるということが実体験を持って語られた。

以上

【文責】 龍谷大学世界仏教文化研究センター博士研究員 金澤豊